

ゼロ冠詞／定冠詞の英仏比較

福谷美保子

Abstract

The aim of this paper is to offer a general overview of the usage of articles in English and French. It begins with an analysis of one of the clauses from the UN resolution 242 (1967) that spurred political disputes over the interpretation of the contrasting terms: 'territories' (English) vs. 'les territoires' (French). The use of the English zero-article plural noun 'territories' can be interpreted as either generic or specific and thus semantically ambiguous, whereas its French counterpart 'les territoires' does not allow such ambiguity. Next, the paper will consider the comparative argument on generic usage in both languages, and then discuss issues surrounding the definite article 'the' and the zero article in the literary context of Hemingway's *Cat in the Rain*.

キーワード：ゼロ冠詞，定冠詞，英仏比較，総称的用法，*Cat in the Rain*

1. はじめに

以下に，ゼロ冠詞／定冠詞の問題について考察する契機となった国連安全保障理事会決議 242号 (1967) の条文のひとつを，英仏両文で挙げる。この条文は，第三次中東戦争（六日戦争）まで発展した中東問題（イスラエル対エジプト，ヨルダン，シリア間の敵対関係）の平和的解決をめざし，制定されたものである。

(1a) *En.* Withdrawal of Israeli armed forces from territories occupied in the recent conflict

(1b) *Fr.* Retraite des forces armées israéliennes des territoires occupés lors du récent conflit

「領地」を表す英語 *territories* は定冠詞なしの複数名詞，フランス語 *des territoires* (= *de les territoires*) には定冠詞 *les* が含まれている。島岡 (1990: 92) によると，フランス語では，この場合，「総称」の意になり，「全占領地からの撤退」以外の解釈を許さない。それに対して，英語における定冠詞なしの複数名詞は，総称的とも部分的とも解釈できる。イスラエルは，この英語の曖昧性を利用し，「部分的」撤退によって，決議履行を主張した (島岡 1990: 92)。定冠詞 *the* の不在により，「完全」撤退か「部分」撤退かという意味解釈の揺れをこれほどまでに許容し，結果として，政治的論争の端緒となった事実は，言語的観点からも看過できない。本論考の目的は，英仏両言語における冠詞全般の振る舞いを，比較対照を通じて概観し，その特徴の一端を窺い知ることにある。まず，第2節では，不可算名詞（物質名詞）の部分的，総称的用法を

取り上げ、英仏両言語の相違点を紹介する。続いて、第3節では、両言語の可算名詞の総称的用法を比較対照する。次に、第4節では、フランス語のゼロ冠詞について、簡単に触れる。そして、第5節では、ヘミングウェイの短編作品 *Cat in the Rain* を取り上げ、とりわけ、ゼロ冠詞と定冠詞 *the* の振る舞いと、その意味的効果について考察する。この作品を選んだ理由は、*cat* (*kitty*) という名詞に対して、ゼロ冠詞、不定冠詞、定冠詞、指示詞すべてが用いられているため、それらの意味的作用を分析するのに適していると判断したためである。最後に、第6節で、まとめを述べる。なお、出典の明記のない例文は、すべて原文に対する筆者の訳文、あるいは作例である。

2. 不可算名詞における英仏比較

2.1 物質名詞の部分的用法について—ゼロ冠詞（英）と部分冠詞（仏）

島岡（1990: 94）は、不定冠詞は「数詞」を起源とするため、量で計られる物質名詞には使用できないとし、この場合、今日の英語では原則、ゼロ冠詞となり、フランス語では部分冠詞 (*du, de la*) を使用すると述べている。以下、例文を挙げる。

- (2a) She took bread and jam. (島岡 1990: 94)
 (2b) Elle prit *du* pain et *de la* confiture. (島岡 1990: 94)

とはいえ、「中仏語まではゼロ冠詞の例が多く、不特定のそれと形の上で区別できなかった（島岡 1990: 95）」という¹⁾。

- (3) Je vuel *vin* boire et *char* mangier. (島岡 1990: 95)
Lit. I want *wine* drink and *meat* eat.

「この区別をはっきりさせるため、フランス語では名詞の前に *de* をつけて部分をあらわすことが古くからあった。²⁾ おそらくラテン語の部分属格から出たもの（島岡 1990: 95）」としている。

2.2 物質名詞の総称的用法について

2.2.1 英語の場合

Milsark（1977）は、次の (4a) は、ゼロ冠詞 *coffee* を総称的に、(4b)、(4c) は部分的に解釈することが文脈から想定されると指摘している。いずれの場合も、*coffee* は同形を保っている。

- (4a) *Coffee* is tasty. (Milsark 1977: 7)
 (4b) We found *coffee* in the pot. (Milsark 1977: 7)
 (4c) There is *coffee* on the stove. (Milsark 1977: 7)

2.2.2 フランス語の場合

以下, (5a)~(5c) は, (4a)~(4c) の訳文である。

- (5a) *Le café* est bon.
- (5b) On a trouvé *du café* dans la verveuse.
- (5c) Il y a *du café* sur la cuisinière.

総称的用法である (5a) には定冠詞 *le* が, そして (5b), (5c) には部分冠詞 *du* (=de *le*) が, 物質名詞 *café* についている。現代フランス語においては, この場合, 総称的に表すには定冠詞 *le* (女性名詞の場合は *la*) が不可欠である。しかし, 英語においては, ゼロ冠詞が一般的であり, 総称的か部分的かは, 少なくとも形の上では区別できない。

3. 可算名詞における英仏比較

3.1 総称的用法

安井 (1987: 627) によると, 一般的に, 英語の名詞句が「総称的」に解釈されうる形は, 以下の3つのタイプがある。

- (6a) 不定冠詞 + 単数名詞 (e.g. *a dog*)
- (6b) 定冠詞 + 単数名詞 (e.g. *the dog*)
- (6c) ゼロ冠詞 + 複数名詞 (e.g. *dogs*) (例は引用者による)

フランス語においては, 以下の3つのタイプが挙げられる (島岡 1990: 91)。また, 英語とは異なり, フランス語には, (6c) のような [ゼロ冠詞 + 複数名詞] の「総称的」用法は存在しない。

- (7a) 不定冠詞 + 単数名詞 (e.g. *un chien*)
- (7b) 定冠詞 + 単数名詞 (e.g. *le chien*)
- (7c) 定冠詞 + 複数名詞 (e.g. *les chiens*) (下線は引用者による)

ただし, 留意すべき点がある。安井 (1987: 628) は, Leech and Svartvik (1975) を援用し, (6) の a, b, c の3つの形は, 常に交替可能であるわけではない。たとえば, (6b) と (6c) とは, (8) にみるように分布が異なる, と述べている。

- (8a) *A tiger is in danger of extinction. (安井 1987: 628)
- (8b) The tiger is in danger of extinction.³⁾ (安井 1987: 628)
- (8c) Tigers are in danger of extinction.
- (8d) ??The tigers are in danger of extinction.

(8a) は、‘one member of the class’ という意味を、(8b) は ‘the whole set’ という意味をそれぞれもっていると考えることによって説明できると思われる (安井 1987: 628)。なお、藏藤 (2012: 87) によると、形式意味論において受け入れられている説明はより簡潔で、(8a) のような [不定冠詞 + 単数名詞] は「種を指示しない」、とした上で、「名詞表現は独自の指示対象を持つものと、述語 (= 個体の集合) に解釈を表すもの」に分けられ、「たとえば、John is a student. では John は指示対象を持っているが、a student は「1 人の学生」を指しているのではなく、学生の集合を表している。つまり、John is a student. は、「John が学生の集合の要素である。」という意味である」と述べている。

次に、フランス語を見てみる。

(9a) *Un tigre est menacé d’extinction.

(9b) Le tigre est menacé d’extinction.

(9c) *Des tigres sont menacés d’extinction.

(9d) Les tigres sont menacés d’extinction.

(9a) [不定冠詞 + 単数名詞] は、英語と同様に容認不可とされる。(9b) は、「トラという種」全体という解釈がなされ、総称的と捉えられる点もまた英語と変わりはない。(9c) [不定冠詞 + 複数名詞] は、一部のトラ、つまり「部分的」解釈となるため、総称的な解釈とはならず、容認不可⁴⁾とされる。(9d) [定冠詞 + 複数名詞] は、「個々すべてのトラ」という意味になり、総称的に解釈される。では、次に、(7b) [定冠詞 + 単数名詞] が、常に総称的な意味を持つかどうかを検討する。

(10a) La femme est l’avenir de l’homme.⁵⁾ (プヨ 2016: 11)

(10b) ?? La femme est bavarde. (プヨ 2016: 11)

(10c) Les femmes sont bavardes. (プヨ 2016: 11)

(10a) は、「女性は、男性／人類の未来である」という意味であるが、ここでの女性 la femme [定冠詞 + 単数名詞] は特定の女性を指しているわけではなく、「総称的」に用いられている。しかしながら、同じ la femme [定冠詞 + 単数名詞] であっても、(10b) の文においては、「総称的」な読みの容認度は低くなる。もし、「総じて、女性というものはおしゃべりだ」と意図するなら、(10c) のように les femmes [定冠詞 + 複数名詞] で表現する必要があると、プヨ (2016) は指摘している。これは、[定冠詞 + 単数名詞] = 総称的用法、という定式が、常に成立するとは限らないことを示唆するものである。英語ではどうかをしてみることにしよう。

(11a) ?? The woman is chatty.

(11b) *The women are chatty.

(11c) Women are chatty.

(10b)と同様に、(11a)の「総称的」解釈の容認度は低い。また、(11b) the women [定冠詞＋複数名詞]は、それ単独では「総称的」に解釈することはできない。総称的に表すのであれば、(11c)のように、 ϕ women [ゼロ冠詞＋複数名詞]と表す必要がある。

なお、小田(2019: 116)は、(7a)～(7c)の総称的用法の特徴と相違点を明示しつつ、より詳細に説明している。以下、引用する。

- a. 定冠詞単数 le X: X に多様性・個別的差異を認めず、Xを不可算のものとして捉える。Xは、(同じカテゴリーレベルに属する) VやW, Y, Zなどその他の種と対比される。
- b. 定冠詞複数 les X: X に多様性・個別的差異を認め、Xを可算のものとして捉える。Xの集合はさまざまなXを含む不均質な集合である。
- c. 不定冠詞 un X: X の集合から一つの要素 un X を取り出し、集合するすべてを代表させる。他の種との対比はない。具体的な発話状況が引き金となってそれぞれの状況に即したXの特徴について語ることが多い。(小田 2019: 116)

(下線は引用者による)

4. フランス語におけるゼロ冠詞について

島岡(1970: 86)によると、ロマンス語における「定冠詞の起源は指示代名詞であり、もっぱら具体的な「もの」を指示することに限定されていた」ため、「抽象名詞や、普通名詞でも一般的に用いるばあいには、冠詞はつけられなかった」という。この古い用法の名残りとして、(仏) *avoir faim* / (西) *tener hambre* / (伊) *aver fame* (*lit. have hunger*) などが挙げられている。また、「冠詞が具体的・現実的なものにだけつけられる」ことから、逆に「冠詞そのものが名詞を具体、現実化する標識として意識されるようになった」としている(*ibid.*)。また、島岡は、11世紀の『ローランの歌』を一例に挙げ、同じ「空」*ciel* という言葉が、「天の下」*suz ciel* ではゼロ冠詞、「空へ向けて」*cuntre le ciel* では冠詞をとり、非現実・抽象的な前者と、現実・具体的な後者との差をはっきりとあらわしている、と主張している。同様に、小田(2019: 168)も、「冠詞のない名詞は現実世界に実体を持たず(つまり現働化⁶⁾がなく)、概念のみを表す」と述べている。また、東郷(2006)は、定冠詞の機能について概観した上で、ひとつの説として「存在前提説」(代表的なものに Ducrot 1972)を紹介している。これは、「定冠詞の指示機能が弱まり、遂には存在前提(*existential presupposition*)しか持たなくなったとする説」である。小田(2012: 26-28)もまた、この説について、さらに詳しく言及している。この「存在前提説」は、換言すると、定冠詞の有無が、実体としての存在の有無と密接に関連している、とも解釈できよう。

では、次に実例を挙げ、ゼロ冠詞の振る舞いを観察する。なお、(12b)は、(12a)の訳文である。

- (12a) Les nouvelles dépenses obligatoires, *Internet, ordinateur et smartphone*, qu'on règle non pas pour le plaisir de regarder des films sur Netflix, mais parce que la rationalisation des services de La Poste, du fisc, de la SNCF, la disparition des cabines téléphoniques

aussi, ont détruit toute possibilité de vivre sans. (*Le Monde diplomatique*, janvier 2019)
(下線, 斜体は引用者による)

- (12b) The new, obligatory expenses for Internet, computers and smartphones, that we pay not for the pleasure of watching movies on Netflix but because cutbacks to the Post Office, the treasury, the rail service, and disappearance of public phone booths have destroyed any possibility of living without them.

(12a) の下線を施した斜字体の名詞については、いずれもゼロ冠詞となっている。最初の Internet, ordinateur et smartphone については、小田 (2019: 168-169) が説明するところの「同じカテゴリーの複数の対象、または同じレベルで話題にできる複数の対象を列挙するとき」に該当するであろう。因みに、列挙するものが不揃いである場合、あるいは複数の対象を一つ一つ際立たせる場合は、冠詞が用いられるという。

- (13) [新聞記事の見出し] *Des hommes, des ponts, et des drames* (小田 2019: 169)
人間, 橋, そして悲劇

つぎに, *toute* φ *possibilité* (= any possibility) のゼロ冠詞について考えてみる。[定冠詞/複数扱い] の *toutes les possibilités* も存在するが、ここでは、そうはなっていない。先述の島岡 (1970), 東郷 (2006), 小田 (2019) に即して考察すると、ここでの *possibilité* は、あくまで「観念的」可能性を想定してのことではないだろうか。逆に、「具象的」且つ「個別的」に可能性を描きうるものであれば、[定冠詞/複数扱い] になるのではないかと推量される。もう一つ考えられるのは、動詞 *détruire* (destroy) との共起に起因するという見方である。つまり、「インターネット, パソコン, スマートフォンなしで生活する可能性を打ち砕いた」ということは、*possibilité* の存在の打ち消し (否定) を意味する。仮に、前述の「存在前提説」に立脚して考察するなら、定冠詞は顕現しないと考えるのが妥当であろう。この観点から、以下の例文を眺めてみよう。

- (14a) Je n'ai pas *de parents*. Je suis orphelin. (小田 2019: 106)
僕には親がいません。みなしごなんです。
- (14b) Je n'ai pas *des parents compréhensifs et généreux*. (小田 2019: 106)
私の親は、寛大で物わがりのよい親じゃないんです。

小田 (2019: 106) によると、「親」の存在が否定される場合は、(14a) のように *de* φ *parents* (ゼロ冠詞) となるが、「親」そのものの存在が否定されない (14b) では、定冠詞 *les* が内在した形である *des* (= *de* + *les*) *parents* となるという。(14b) で否定されているのは、親の「存在」ではなく、それを修飾する形容詞 *compréhensifs* (物分かりのよい) と *généreux* (寛大な) だからである。換言すると、親の存在は、定冠詞 *les* で担保されている、ともいえるかもしれない。

さらに、小田（2019: 138）は、小説や映画の題名における冠詞の有無に着目して、以下のよう
に述べている。例を挙げる。

(15a) *La Terre des morts*（ジャン＝クリストフ・グランジェの推理小説）（小田 2019: 138）

(15b) *Terre des hommes*（サン＝テグジュペリ 『人間の土地』原題）（小田 2019: 138）

(15a) に定冠詞 *la* が付されているのは、*La Terre des morts* 『死者の土地』に対して、*La Terre des vivants*（生者の土地）が存在するからであり、(15b) は、仮に定冠詞 *la* をつけて ***La*** *Terre des hommes* とすると、「人間以外の住む *Terre*（大地・地球）も存在する」という余計な含意が生じてしまうからである（小田 2019: 138）と説明している。

5. ヘミングウェイの *Cat in the Rain* におけるゼロ冠詞／定冠詞

5.1 定冠詞 *the* の一般的用法

本題に入る前に、定冠詞の一般的用法を、ごく簡単に確認しておく。定冠詞には、通例、つぎの4つの用法があるとされている（安井 1987: 244）。

(16a) 前方照応用法（anaphoric use）

(16b) 後方照応用法（cataphoric use）

(16c) 外界照応用法（exophoric use）

(16d) 唯一照応用法（homophoric use）

(16) のそれぞれの具体例を列挙はしないが、(16a) と (16c) についてのみ、実例で紹介する。(17) は、*The Guardian* 紙（ネット配信版）の記事 “World’s 26 richest people own as much as poorest 50%, says Oxfam”（世界で最も裕福な 26 人が、貧困層 38 億人（世界の総人口の半分）と同等の資産と有する）の一部である。

(17) A global wealth tax has been called for by *the* French economist Thomas Piketty, who has said action is needed to arrest *the* trend in inequality. (*The Guardian*, 21 Jan. 2019)

（下線、斜体太文字は引用者による）

文中の *the* French economist = Thomas Piketty は、記事の中で初出であることから、外界照応用法（exophoric use）と考えるのが妥当であろう。また、*the trend in inequality* については、当該の記事前文から「金持ちは一層金持ちに、貧しい者はどんどん貧しくなる」という傾向を指しており、前方照応用法（anaphoric use）とみなすことができる。では、次に、ヘミングウェイの短編作品 *Cat in the Rain* におけるゼロ冠詞／定冠詞の議論に移る。

5.2 タイトル *Cat in the Rain* のゼロ冠詞 ϕ cat について

原本（英）のタイトルは、可算名詞 cat に対して、「ゼロ冠詞」となっている。通常、可算名詞（単数）は、不定冠詞 a/an ないしは、定冠詞 the を要求する。ゼロ冠詞であれば、猫の一部、つまり「肉片」、と通常は解釈されるところだが、おそらく、文学的意図はそこにはないと思われる。

作品中の女性は、雨の中で小さくなっている猫を指して「あの猫が欲しい」とつぶやく。しかし、彼女が「欲する猫」は、指示形の 'that poor kitty' から不定形の 'a kitty / a cat' まで常に揺れ動き、統一されることはない。作品の後半にかけて、女性が夫に対し、「猫が欲しい、猫が欲しい」と繰り返し懇願する場面がある。以下、引用する。

- (18) 'Anyway, I want a cat,' she said. 'I want a cat. I want a cat now. If I can't have long hair or any fun, I can have a cat.'
—Hemingway, *Cat in the Rain*

ここで反復される不定冠詞 a cat は、any cat と同義に解釈できるだろう。しかし、繰り返すようだが、原題はゼロ冠詞 ϕ cat である。第4節でのフランス語のゼロ冠詞の議論を元に、仮説を立てるなら、ゼロ冠詞 ϕ cat は、「現実世界に実在する猫ではない」と示唆される一では、それは何か。

ここからは、厳密には言語学の領域を超え、文学的解釈の領域に踏み入ることになる。そのため、深く議論することは差し控えるが、ゼロ冠詞 ϕ cat が内包するものが、猫そのものの「実体」でないとするれば、ゼロ冠詞 ϕ cat が表象するものは、猫に投影された女性の「実体」のない欲望ではないか。仮に、猫そのものの「実体」を tangible entity、女性の満たされない「欲望」を intangible entity として対置させるなら、「実体」として存在する（した）the/ (that) cat/ (kitty) 対、立ち現れては消える「つかみどころのない」観念的欲望の投影としてのゼロ冠詞 ϕ cat、という図式化も不可能ではないように思えてくる。なお、興味深いことに、フランス語版翻訳のタイトルは、不定冠詞 *Un chat sous la pluie* と定冠詞 *Le chat sous la pluie* の両方が存在するようだが、原題通りのゼロ冠詞 *Chat sous la pluie* (=Cat in the rain) は、筆者が調査した限りにおいては、見つけることはできなかった。

5.3 定冠詞 the が表象しうる prototypicality の可能性について

以下は、*Cat in the Rain* の冒頭部分である。

- (19) There were only two Americans stopping at the hotel. They did not know any of the people they passed on the stairs on their way to and from their room. Their room was on the second floor facing the sea. It also faced the public garden and the war monument. There were big palms and green benches. In the good weather there was always an artist with his easel. Artists liked the way the palm trees grew and the bright colours of the hotels facing the gardens and the sea. Italians came from a long way off to look up at the war monument. It was made of bronze and glistened in the rain. It was raining.

The rain dripped from the palm trees.

（実線，波線，斜体太文字は引用者による）

—Hemingway, *Cat in the Rain*.

Carter (2018) は、興味深い創見を展開している。まず始めに、このパラグラフは、定冠詞 *the* がとりわけ多く使用されている。実線を施した [the + 名詞] はすべて作品の中では、初出の *the* である。先述の安井 (1987) にならえば、外界照応用法 (exophoric use) にあたる。波線を施した [the + 名詞] は前方照応用法 (anaphoric use) にあたる。つぎに、[the + 名詞] が、代名詞 (pronoun) や同義語 (synonym)、あるいは、下位語 (hyponym) に置き換えられることなく、基本、繰り返されている。Carter は、この反復を ‘circularity of sameness and repetition’ と表現し、読み手の期待を ‘fulfill’ しつつ、同時に ‘unfulfill’ していると指摘している。Carter は、これを ‘deflationary’ と表現している。以下、引用する。

This paragraph is ‘deflationary’, then, for a number of reasons. We expect repeated items to be further modified or qualified in some way. But they are not. Things are also ‘deflationary’ because the features bringing colour and life to the scene are characterised by their absence but are described almost as if they were present. The pattern is one of familiarity leading to over-familiarity and stereotype and of expectation leading to the frustration of expectation. And it is created in the very linguistic texture of the paragraph. (Carter 2018: 139)

海に面したホテル、椰子の木、庭、緑色のベンチ、三脚を立て絵を描く画家、陽光に照らされ眩しく輝く色彩—読み手はここから、ある種の prototypical な「暖色的」ヴァカンスのイメージを膨らませることになる—が、突然、「雨」によって、その期待は裏切られることになる。場面に精彩を与えていたこれらの特徴は、そこにはないにもかかわらず、あたかも現前しているかのごとく描写される。*the* が指し示す ‘familiarity’ がその繰り返しにより、‘over-familiarity and stereotype’ に、そして同時に、‘expectation’ が ‘the frustration of expectation’ へと様相を変えていく、と Carter は指摘している。5.2 で述べたゼロ冠詞 *cat* と同様に、定冠詞 *the* もまた、prototypical なものを想起させるという意味において、ある種、「観念的」である、といえるかもしれない。

6. まとめ

英仏両語における（ゼロ冠詞も含めた）冠詞を比較対照して、それぞれの言語の特徴として、明らかになったことを総括する。最初に、第2節と第3節で議論した総称的用法について、以下のようにまとめる。

○英語

- ・可算／不可算名詞ともに、ゼロ冠詞用法が存在し、その解釈は総称的とも部分的ともなりうる。

- ・可算名詞の総称的用法については、一般的に[ゼロ冠詞+複数名詞]が好まれる傾向にある。
- ・[定冠詞+複数名詞]の総称的用法は、原則、修飾句なしには、容認されない。

○フランス語

- ・ゼロ冠詞用法は、原則、数量詞表現としては存在せず、不可算・可算名詞ともに、総称的か部分的かの意味解釈は、その形によって決定される。この意味において、解釈の曖昧性を許さない。
- ・フランス語の不可算名詞における総称的用法は、[定冠詞+単数名詞]で表し、可算名詞におけるそれは、[定冠詞+複数名詞]が一般的である。但し、東郷(2019)も指摘する通り、名詞が表す類のメンバー全てに成立することでもなくともよい。

e.g. *Les français* boivent beaucoup de vin. (東郷 2019: 22 下線・斜体は引用者による)

フランス人はワインをたくさん飲む(フランス人のなかにはワインを飲まない人もいる)

また、英語・フランス語ともに、[定冠詞+単数名詞][不定冠詞+単数名詞]については、一概に「総称的」用法の範疇に当てはめることはできず、補部や文意など、さらに細かく分析する必要がある。藏藤(2012)は、[定冠詞+単数名詞][不定冠詞+単数名詞]が総称的に解釈されるには、特有の条件が課せられるとし、具体的な議論を展開している。また、森・東郷(2004)は、なぜ un N [不定冠詞+単数名詞] は、総称の読みが容認され、des N/du N [複数不定名詞句/非可算不定名詞句] は容認されないのか議論しているが、紹介のみに留めさせていただく。

次に、第4節では、フランス語の可算名詞のゼロ冠詞用法を概観し、そのひとつとして、実体としての不在を示唆するのではないかと述べた。第5節では、ヘミングウェイの *Cat in the Rain* を題材に、文学的側面からゼロ冠詞/定冠詞 the の意味的效果について議論を展開した。そこで、定冠詞 the が表象しうる prototypicality の可能性について論じた。

注：

本稿は2019年3月25日、立命館大学で開催された国際言語文化研究所主催シンポジウム「学習英文法を巡って」において、口頭発表した内容に加筆・修正を施したものである。なお、本稿の不備はすべて筆者に帰することは、言を俟たない。

- 1) 島岡(1979: 102)は、「語学史の上では、14～16世紀の間を一応中仏語の時期」としている。
- 2) 島岡(1990: 96)は、「英語にも中英語の時期に似た形の the (some) があった」として、次の例を挙げている。I wol eten *of the* cake. (=Lit. I want eat some cake).
- 3) Coulson(個人談話)によると、(8b)の形は、やや old-fashioned であるとし、より一般的な表現は、(8c)であると指摘している。
- 4) Faure(個人談話)によると、extinction の語義が「種の」絶滅を内包するため、des tigres とは相容れないという。
- 5) Aragon, Louis. (1963) *Le Fou d'Elsa* からの引用文。
- 6) 東郷(2019: 18)を引用する。「裸の名詞は意味(内包)しか持たず、実際の事物(外延)をさすことができない。[中略]実際の事物を指すことができるようにする操作を現働化(actualization)という。」と述べている。

謝辞：

英文の文法性判断，及び英文校閲は，David Coulson 先生に，仏文の文法性判断については，Eric Faure 先生に大変お世話になりました。藏藤健雄先生は，形式意味論を苦手とする筆者に対して，最後まで見捨てることなく，温かく御指導くださいました。崎山政毅先生からは，言語哲学や翻訳の問題について論じられた文献をいろいろと御教示いただきました。また，テキストに厳密且つ忠実に向き合っておられる先生の姿には大いに感銘を受けました。東郷雄二先生からは，とりわけ連想照応（anaphore associative）について，何が議論されてきて，何が明らかになっていないのか，ひとつひとつ懇切丁寧に御教授いただいています。小田涼先生は，いつも興味深い実例を通して，好奇心や内省を喚起する問いかけを投げかけてくださいます。ここに，御指導くださった先生方すべてに対し，衷心より感謝の意を表します。また，温かいお言葉をかけてくださった石井昌子氏にも，ひと言御礼申し上げます。苦しい局面にあって，同氏の応援には随分と励まされました。

参考文献：

- Carter, Ronald. (2018) "Style and Interpretation in Hemingway's 'Cat in the Rain'". reprinted in: Toyota, Masanori (ed.) *Stylistics* Vol. 1. New Delhi: Sage, pp.129-144.
- Leech, G. N. and J. Svartvik. (1975) *A Communicative Grammar of English*. London: Longman.
- Milsark, Gary. L. (1977) "Toward an Explanation of Certain Peculiarities of the Existential Construction in English." *Linguistic Inquiry*, 3: 1-29.
- 小田涼. (2019) 『中級フランス語 冠詞の謎を解く』東京：白水社.
- 小田涼. (2012) 『認知と指示 定冠詞の意味論』京都：京都大学学術出版会.
- 藏藤健雄. (2012) 「総称文と冠詞」藤田耕司・松本マサミ・児玉一宏・谷口一美（編）『最新言語理論を英語教育に活用する』pp. 84-93. 東京：開拓社.
- 島岡茂. (1970) 『ロマンス語の話』東京：大学書林.
- 島岡茂. (1979) 『フランス語の歴史』第3版. 東京：大学書林.
- 島岡茂. (1990) 『英仏比較文法』東京：大学書林.
- 東郷雄二. (2019) 『フランス文法総まとめ』東京：白水社.
- 東郷雄二. (2006) 「冠詞は何を表しているか—意味論と語用論のはざまで—」『エネルギー』31: 1-20.
- ブヨ, バティスト. (2016) 「フランス語の定冠詞の単数形 LE と複数形 LES における数的相関性をめぐって」『日本ロマンス語学会誌』49: 11-20.
- 古川直世. (2005) 「フランス語における定冠詞の内包指示用法について」『フランス語学研究的現在』pp.75-94. 東京：白水社.
- 前島儀一郎. (1986) 『英仏比較文法』第3版. 東京：大学書林.
- 森香奈絵・東郷雄二. (2004) 「フランス語の不定名詞句主語」『人間・環境学』13: 21-31.
- 安井稔（編）. (1987) 『例解 現代英文法事典』東京：大修館書店.

参照新聞：

Le Monde diplomatique ル・モンド・ディプロマティック（月刊紙）2019年1月号

参照ウェブサイト：

国連安全保障理事会決議 242号（1967）

<https://unispal.un.org/unispal.nsf/0/7D35E1F729DF491C85256EE700686136> (閲覧日 2019.01.20)

The Guardian ガーディアン紙 (インターネット配信版)

<https://www.theguardian.com/business/2019/jan/21/world-26-richest-people-own-as-much-as-poorest-50-per-cent-oxfam-report> (閲覧日 2019.01.21)